

God Bye in Peace

奨励	越川 弘英〔こしかわ・ひろひで〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター副所長 同志社大学キリスト教文化センター教授
研究テーマ	キリスト教の実践神学（礼拝・宣教・牧会）

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし
あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて
あなたに平安を賜るように。

（民数記 六章二四―二六節）

ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

（ルカによる福音書 八章四三―四八節）

God Bye in Peace

秋学期の講義も最終週となりました。これから試験期間、そして年度末、さらには少し早いですが卒業式のシーズン、別れの季節に向かうときとなります。今日は今学期のチャペル・アワーのテーマである「平和」ということについて、とくに今年度で同志社を巣立っていく方々を念頭に置きながら、お話しさせていただきます。今日の奨励題として、God Bye in Peaceという言葉掲げました。God Byeというのは奇妙な言葉です。本当はGood Byeと書くべきところですが、語源的にはGod Byeが正しいのだそうです。もっと正確に言うと、英語の「グッド・バイ」（さようなら）というのは、God Be With Ye (You) を縮めたもので、「神があなたと共におられるように」というのがもとの意味でした。ですからそれはGood MorningとかGood Eveningといった言葉とは語源的にはまったく異なるものですが、習慣的に使っているうちにGodがGoodに延び、Be With Ye (You) は最初のBと最後のYeだけが残ってByeとなったようです。後に続くin Peaceは私が付けた追加の言葉ですが、「神が共におられます、平和のうちに行きなさい」という意味で理解していただきたいと思います。

「平和」の三つの次元

さて、今学期のチャペル・アワーの統一テーマとして掲げられている「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」は、マタイによる福音書五章九節に出てくる言葉です。改めて「平和」と言われると、たとえば「戦争と平和」とか「世界平和」などといったことを連想するかもしれませんが、平和というのは、決してそうした大がかりな次元にだけ関わるものではありません。私はきちんと平和学というようなものを学んだ人間ではありませんが、自分なりに考えてみて、少なくとも三つの次元での平和というものを考えてみることができると思います。それはまず第一に、今も言いましたような「世界的・社会的な次元での平和」です。第二に私たちの日常生活に関わる親しい人びととの間の平和、つまり家族とか友人、学校や職場の仲間など、私たちにとって「意味深い人びととの間における平和」という次元です。そして第三に「私自身に対する平和」という次元を挙げたいと思います。この第三の平和というのは「自分自身をきちんと受け入れられるか」という課題として理解してもらってもいいかもしれません。すなわちそれは自分自身のアイデンティティに関わる問題です。これら三つの次元の平和はすべてが重要であり、そのすべてにおいて平和が満ちあふれているときにこそ、私たちはほんとうに平和であると言えるのだらうと思います。また私たち自身も、主體的にそうした平和を創り出していくことが求められているのだと思っています。けれども、悲しいことには、こうした三つの次元の平和は、常にすべてが実現しているわけではありません。むしろ、常に問題があることのほうが現実であって、三つのうちの一つ、あるいは二つ、あるいは三つ全部が、平和ではないという場合も決してまれなことではないのです。

第一の平和

世界の平和、社会の平和ということ言えば、戦争や紛争のない時代、あるいは飢餓や病気などによる苦しみのない時代などというのが、人類の歴史のなかでどのくらいあったのでしょうか。日本の場合、直接私たちの国が戦争の当事者になるということこそ、この六十年あまりにわたって起こっていません。しかし、今なお沖縄を初め国内各地に軍隊の基地をめぐる問題があり、この不況のもとで経済的格差が広がりつつあるという問題があります。また毎年三万人の自殺者が出るという現実、さらに昨年の地震や津波、原子力発電所の事故以来、生活を脅かされ健康を脅かされている人びとが増え続けているという現実があります。こうした事例を取り上げるだけでも、私たちの国が平和であるというわけにはいきません。私たちを取り巻くこうした大状況としての平和に関わる問題が完全に解決される日がいつやって来るのか、私たちには分かりません。しかし、それがまだ実現されていないなかでも、私たちは生きていかなければなりませんし、生きてきたし、これからも生きていくのです。

第二の平和

第二の次元における平和も、それを実現し保ち続けることは決して容易ではありません。殊に、今ここに集まっておられる学生の皆さんのように、二十代前後の思春期、そして社会人への入口にある方たちにとっては、この第二の次元の平和はとても切実な問題なのではないかと思います。今はかつてのように、生まれによって身分や職業が決まっているという時代ではありません。また、一度どこかの会社に就職すれば、それで人生の先行きが見通せるという時代でもありません。人間関係はより複雑なものとなっており、家族や友人などとの関係も、よく言えば非常に繊細、悪く言えば脆弱なものとなっている印象を受けます。最近の多くの人びとの携帯電話やメールの使い方を見てみると、私はときどき馬鹿馬鹿しいほどにあきれた思いを抱く一方、むしろ痛々しいような思いをもつことがあります。殊に中高生とか大学生などを見てみると、そこまで頻繁にそこまで細々(こまごま)と友人や仲間と連絡をとる必要があるのだろうかと思い、いやむしろ、そうしなければ安心できないような人間関係の難しい時代と世代を彼ら彼女らは生きているのかもしれないと考えることもあります。しかし、振り返ってみれば、それは若い人たちだけでなく、実は私も含めて、この時代に生きる大半の人びとが感じている人間関係の難しさなのかもしれません。家族の関係、親子や夫婦のかたちも、急速に変化し多様化しつつある時代です。このような最も親しい人間関係の基本的なモデルですら、この時代は定番のものを失いつつあるように見えます。将来、家族というかたちそのものが失われていくことを示唆する研究者もいるといえます。東日本大震災の後、「絆」という言葉が一種のブームとなり、また「家族と一緒に普通の生活ができる」ことがどんなにすばらしいかということを語る声が日本中に溢れました。昨年の災害は確かに私たちに多くのことを教えました。しかし翻って考えてみると、そうした共感の思いは、実はもっと前から、こうした「絆」や「普通の生活」が私たちの間で失われていた現実、そして失われつつある現実を反映する声なのかもしれません。しかし、私たちは仮に家族や友人、そうした親しい人びととの間に平和が成り立っていないときにも、やはり生きていかなければならないのです。

第三の平和

さらに第三の平和、自分自身との平和ということ言えば、おそらく誰もがそのことで悩んだり、不安をもったりしてきたことと思います。私自身、自分を受け入れるということでは、あまりにも安易に自分を容認して甘やかすすぎていたり、あるいは逆に過度に自分を否定的に見つめたり、今に至っても、自分自身との折り合いをつけるということは課題でありつつづけています。しかし、自分自身に対する関係という問題について言えば、おそらく思春期という人生の過渡期にあるあなた方、夢や希望にあふれていると同時に不安と悩みに満ちている時代を生きているあなた方のほうが、私とは比べものにならないくらい大きな課題として、この問題に直面しているのではないのでしょうか。受け入れるに値しないように見える自分自身を嫌になったり、それを直視することから逃げようとしたり、あるいはまた「幸せの青い鳥」がどこかにいるような幻想に迷った

り・・・。自分自身のあるがままの姿を、水増しすることなく、また割引することなく、静かに落ち着いて、ほんとうにきちんと受け入れるということは、実に困難な課題です。しかし、たとえそうした困難のただなかにあるときでも、私たちはやはり生きていかなければならないのです。

この世界のなかに完全に平和が成り立っていないときにも、家族や友人といった意味深い隣人たちとの間に平和が成り立っていないときにも、また自分自身との間に平和が成り立っていないようなときにも、私たちは生きていかなければなりません。私たちの先祖・先達たちも同じように、こうしたいくつもの次元において平和ではない状況を抱えながらこれまで生き続け、歩み続けてきたのです。

十二年間の病を抱えた女性

今日の聖書を見てください。ここには、「十二年間このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた」と記されています。

「十二年間」です。「全財産を使い果たした」のです。それにもかかわらず、「だれからも治してもらえなかった」というのです。

彼女の人生は悲惨です。先ほど申しました三つの平和はどれも成り立っていません。

平和の第一の次元について言えば、そもそもこの時代は、社会全体が強大な力をもったローマ帝国によって支配され、聖書に登場する人びとは植民地の人間として生きている時代です。「バックス・ロマーナ」はローマ人にとっての平和だったにすぎません。また当時のユダヤ人社会は女性差別を当然視するような世界でもありました。それでも彼女は、この世界のなかで生きてきたのです。

平和の第二の次元について言えば、彼女にとって身近だった人びと、家族や友人たちは、この場面にまったく登場しません。そうした人たちはどこへ行ってしまったのでしょうか。福音書の別の箇所には、体の不自由な人をイエス・キリストのもとに連れてくるために一生懸命にがんばった友人たちのエピソードを伝える物語が出てきます。彼女の周りにそういう人はいなかったのでしょうか。当時、女性の出血異常という症状は宗教的にことさら汚れた病気とみなされており、皆がそういう人に触れることを避けたといえます。家族や友人ですら「避けた」ということなのでしょう。聖書がここで、「だれからも治してもらえなかった」と告げている「だれからも」という言葉のなかに、たんに医者だけでなく、友人や家族を含めて、彼女が周囲の人びとから見放されていたことを読みとろうとするのは行き過ぎでしょうか。

平和の第三の次元、自分自身に対する平和ということで言えば、十二年間という長い期間、不健康な体をもつ自分、また宗教的な意味から汚れた存在とみなされざるを得なかった自分に対して、彼女が心穏やかに満足していたとは考えられません。こういう病気に取り憑かれた自分に対する情けなさ、怒り、葛藤、あきらめ、絶望・・・そういったネガティブな思いが渦巻いていたのではないかと思います。

しかしまた、その彼女が、今あるがままの自分に完全に絶望しきっていたわけではないことは、この場面でも何とかして治りたい、救われたいと願って、わざわざ人混みのなか、イエス・キリストのもとに近づいてきたということからも察せられます。彼女は自分を受け入れないままで終わりたいくなかったのです。自分自身をもう一度取り戻したい。自分自身との間に平和を創り出したいのです。

平和が成り立っていないときにも、彼女は生きていかなければならず、生きてきたのであり、そして生きていこうとするのです。

第四の平和～「安心して行きなさい」

福音書はこの女性の願いが成就したことを告げています。彼女はひそかにイエス・キリストの衣に触れ、そして治りました。彼女を癒したはずのイエス・キリスト自身、そこで何が起ったのかわかりませんでした。彼女の熱意が癒しをかちとったのです。イエス・キリストは、むしろ彼のほうが必死になって、それが誰であったのかを知ろうとし、彼女を捜し出します。そして彼女に向かってこう言います。

「娘よ、あなたの信仰があなたを救った」。

「あなたの信仰」というのは、「信頼」と言い換えてもいい言葉です。神に対する、あるいはイエス・キリストに対する「あなたの信仰／あなたの信頼」があなたを救った。

神もしくはイエス・キリストに対するこうした信頼、そこから生まれてくる関係を、私は平和の第四の次元と言いたいと思います。

この世界、隣人、そして自分自身との間に平和が成立していないとき、この世界も、隣人も、そして自分自身も信頼できないように思われるときにすら、それでも究極的な意味で私たちを支える平和がある、私たちが信頼すべきものがある、それを聖書は神、またイエス・キリストであると告げているのです。

このような第四の平和、究極的な信頼と言うに値するものこそ、私たちがこの世のすべてに絶望するようなときにも、人生が生きるに値しないように思われるときにも、私たちを支える「すべての平和の根拠としての平和」となり、「あらゆる信頼の根拠としての信頼」となるのです。

イエス・キリストは言います。

「安心して行きなさい」。

この「安心」は「エイレーネー」というギリシア語が使われています。「エイレーネー」はふつう「平和」と訳される言葉です。おそらく、もともとイエス・キリストはここで「シャローム」（平和）というヘブライ語を使ったのではないかと思います。つまり彼は彼女に向かって、「平和のうちに行きなさい」と告げたのです。

十二年間の病気、そこから生じる痛みや悩みや苦しみ、人間関係の問題、自分自身に対する葛藤から解放たれて、今、この女性は新しい人生に踏み出すのです。

「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」。言い換えれば、「あなたの信頼する神は、あなたを決して見捨ててことはない。平和のうちに行きなさい」ということでしよう。

あえて言えば、病気が治ったからといって、この女性の残りの人生がすべてハッピーエンドに終わったという保証は全くありません。その後も病気は振り返したかもしれないし、そうでなくとも、いろいろな病気にかかったり、生活に困難を覚えたり、また人間関係で悩んだり、自分自身がいやになったりしたこともあったでしょう。しかしそうであっても、十二年目に巡り会ったイエス・キリストとの出会い、そして平和を告げるその言葉は、彼女の残りの人生を支えるものとなったと私は思います。

よく覚えておいていただきたいのは、彼女がそうした新しい人生に踏み出すまでに十二年間という長い年月が横たわっているということです。十二年間は長いのでしょうか、それとも短いのでしょうか。私たちが真の平和の根拠となるものを見出すためには、それは必ずしも長すぎる期間ではないのかもしれませんが。少なくともこの女性にとってこの十二年間は決して無意味ではなかったのです。

人生の意味というのは、後になって分かってくるということがあります。即断してはいけません。あきらめてもいけませんし、投げ出してもいけません。分かったようなつもりになって、人生や自分自身を見くびるようなことがあってもいけません。

皆さんがこの同志社を離れて、真に信頼に値するもの、皆さんにとって真の平和の根拠となるものを見いだすまでには、五年、十年、そして十二年といった長い年月が、また様々な人生経験が必要となるかもしれないということを心に留めておいてほしいと思います。

これからのそうした長い歩みを歩み出すに際して、この同志社を離れる皆さんに、「さようなら」という意味ではなく、「神が共におられます、平和のうちに行きなさい」という意味を込めてGod Bye in Peaceという言葉を送りたいと思います。

ここにいる皆さんが全部クリスチャンだとは思いませんし、将来もクリスチャンになることはないかもしれませんが、神さまはそれでも皆さんのことをいつも見守っておられます。God Bye in Peace—「神があなたと共におられます、安心して行きなさい」。